慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スミス以前に於ける貨幣価値論の二潮流
Sub Title	
Author	萩原, 吉太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.1 (1925. 1) ,p.95- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250101-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は其日の重要なる發見を公爵に報告した。最後まで姿を現さなかつたのがMarx及びRodbertusのLassalle宛の書簡であつた。而して始めて其鑑定を終へた日は、宛も一佛蘭西將校が來て、城が明日再び宿營に充てらるべきことを通告した日であつた。Lassalle文書は斯くして世に公にせらるゝことを得たのである。這般の喜憂と感慨とは、自ら史料搜索の經驗あるものにして始めて之を知るべきである。筆者はMayerが積年の苦心の酬ひられたることを喜び、更にその「遺稿」の殘された第五卷を公にする日の近からんことを祈るものである。

雜　錄

スミス以前に於ける貨幣價値論の二潮流

萩原吉太郎

一

歷史的發達の上より考察すれば、貨幣は其の素材の實體價値と結合しつゝ發生するも、此の結合は貨幣官能の發達に隨伴して漸次弛緩を來し、分裂を生ずるの傾向を有す。爰に於て乎、必然貨幣本質に關する根本的なる一問題は生起せざるを得ず。即ち貨幣が其の諸般の官能を果す爲めに貨幣は夫れ自ら價値たるを要するや、將又夫れ自ら價値たるを要せざるやの問題是なり。吾人は貨幣夫れ自ら實體價値たるを要すとなす學說を金屬主義と呼び、貨幣夫れ自ら實體價値たるを要せずとなす學說を名目主義と稱ふ。スミス以前の貨幣論も恒に此の二點の間を往來して歇まず、或者は貨幣の現實的取扱を高調して前者に組し、或者は其の象徵的取扱を强調して後者に走りぬ。然らば貨幣本質に關する這個の對立は貨幣價値論上に如何なる反映を招來するや。是本論文の主眼點をなす。今スミス以前の諸般の文獻を涉獵し來りて、其の貨幣價値論を二者孰れかに分類整正すれば次の如し。

金屬主義貨幣價値論

貨幣價値は需要供給の關係に由り支配せらるとなす說、

貨幣の自然價格は其の生產費に依賴し、其の市場價格は需要供給の關係、又は唯單に供給のみに由り調整せられ、然も後者は前者に歸向せんとするの傾向を有すとなす說

貨幣價値は效用並びに稀少性に依賴すとなす說、

名目主義貨幣價値論

貨幣價値は國家の權威に憑依すとなす說、

貨幣價値は貨幣供給のみに由り支配せらるとなす說、換言すれば、貨幣總量と貨物總量との間に相等性の定立せらるとなす說、

以下順次之を述べん。

二

貨幣價値は需要供給の關係に由り支配せらるとなす說の研究

參考書

Jean Bodin : Reponse aux paradoxes de M. de Malestroit touchant l'enchérisement de toutes les choses et des monnaies (1568) (Baudrillart; J. Bodin et son temps., 1853 に據る)

John Law; Money and Trade considered, with A Proposal For Supplying the Nation with Money. (1705)

Jean-François Melon : Essai Politique sur le Commerce (1734)

(Économistas Financiers du XVIIIe siécle. Tome. I., 1851 に據る) Sir James Steuart; An Inquiry Into The Principle Of Pol-itical Economy; Being An Essay On The Science Of Domestic Policy In Free Nations. In which Are Particulary Considered Population, Agriculture, Trade, Industry, Money. Coin, Interest, Circulation. Banks, Exchange, Public Credit, And Taxes. (1767)

貨幣價値論上需要供給法則の建立せらるに先だち、貨幣供給のみを重視するの風滔々として流れつゝありたり。從つて吾人の研究は此の一派の檢討に始まる。

抑も貨幣供給の高調せらるゝに至りしは近世初期新大陸發見以降の事に屬し、而して其の端を啓ける者を Bodin となす。固より貨幣供給の寓目は此の時に始まり、新大陸よりの金銀流入の影響の感知は此の人に始まるものにあらず。既に中世に於て、Henry of Ghent, Antonine of Florence 等は貨幣供給の增減は物價變動と

馴致すべきを說き、又 Noël de Fail, Gomara は新大陸よりの金銀輸致の結果を推知せり。然れ共時人及び後人に著大なる感化を及ぼし、以て這般の傾向を釀成せる者を Bodin となす。彼れは先づ物價昂騰の事實を摘示したる後曰く、「吾人の目睹する高値は三個の原因より生起せるを認む。其の主要にして殆んど唯一原因たるものは、今日當王國に於ける四百年以前の存在量よりも遙に豐富なる金銀量にして、此は從來何人も洞見するに至らざりし所なり。高値第二の原因は幾分專賣に歸因し、第三原因は災害と同じく貿易に依り招來せらるゝ必要品の窮乏にして、最後の夫れは帝王及び大領主の奢侈にして、彼等の好尙する所の財貨の價格を昂騰せしむ」(p. 169) と。(Baudrillart は千五百七十八年版に由れるも、他版に由れば、Bodin は "le prix des monnaies, pui est ravalé de son ancieune estimation" なる一因を附加し、"quatre ou cing causes" と說く。—— Ramband: Histoire des Doctrines Economiques. p. 97) 斯く彼れは貨幣價値變動の原因を敍述したる後、更に之が例證を試みたり。其の一に曰く、「孰れの地に在りても、百般の財貨を高値ならしむる主要原因は、該財貨に評價及び價格を附與する物件の許多なり。Plutarque 及び Pline の言ふ所に據れば、Macédonia 王國征服後、將帥 Paul-Émile が莫大の金銀を羅馬に齎せしかば、庶民は tailles の支拂を免れ、其の地の地價は一朝にして三分ノ二上れり。されば金銀の輕視、被評價物件の高價を誘致せるは、增減する事なき土地の缺乏にあらず、又斯る時に生起する事なき專賣にあらず、其は金銀の夥多なりき」。(pp. 169-170) と。然らば數世紀來佛國に於ける金銀量の增大せるは何故ぞや、彼れは此の問題に答へて、之を輸出膨

脹、及び Lyon 銀行に歸す。斯くて言へり、「爰にこそ二百年來吾人が巨額の金銀を輸致したる方計の存するなれ。伊太利に於てすら貴族が貿易を營み、又西班牙の民は他の業を營まざる有樣なれば、西班牙及び伊太利には佛蘭西よりも多量の金銀存在す。されば凡ゆる物件は西伊二國に於ては佛國よりも、西班牙に於ては伊太利よりも其の價高し」。(p. 173)と。

如上 Bodin の所說は貨幣數量說の萠芽と看做し得るや否や。是學者間に議論の存する所、Dubois (Précis de l'Histoire des Doctrines Économiques. pp. 185-186) Rambaud (op. cit., p. 98) は萠芽なりと主張し、Laughlin (The Principles of Money. p. 226) Monroe (Monetary theory before Adam Smith p. 58) は之に反對す。此の問題に答へんとせば、必然貨幣數量說の解釋に論入せざる可らず、斯くては吾人の注意を Laughlin は Law も亦貨幣數量のみ著に目せる如く記すも、(op. cit p. 229) 固より當らず。

謂へらく、「銀は、其の金屬としての用途に對し評價せられし所に隨つて、交換せられ、其の交換に於ける價値に隨つて、貨幣として給付せらると思考するは正鵠を穿てり。銀の貨幣としての新用途は其の價値を增加せざるを得ざる可し。蓋し其が貨幣として物々交換に於ける不利不便を除去し、其の結果銀の需要を增加し、斯くて貨幣用途の生める增加需要に等しき附加價値を受くるを以てなり」。(p. 10) 「地金又は貨幣としての銀は、其の供給又は需要に於ける變動より其の價値を變ず。其の孰れの場合に在りても、世人は物價が騰落せりと言ふ。然れ共、銀又は貨幣の價値が、或は大或は小なるに從つて其が或は貨物の大量と或は貨物の小量と等しきなれば、價値騰落せるは銀又は貨幣なり」。(pp. 62-63) 「昨年百頭の羊百クラウンにて賣却せられたるが、今年其の販賣人が同一頭數の羊を購入せんと欲す。然る時、羊の數量並びに其の需要昨年と同一なりとも、銀の數量增加し、而も之に比例して其の需要增加することなければ、百頭の羊は昨年より多額の貨幣と其の價値に於て等しかるべし。從つて貨幣は低廉なり。貨幣數量並びに其の需要昨年と同一なりとも、羊の數量減少するか、或は其の需要增大する時は、百頭の羊の價値は昨年より多額の貨幣と等しかるべし。從つて羊は高價なり」、(pp. 63-64) と。斯くて彼れは千四百九十五年以後の蘇國に於ける物價地價檢討の後、「貨幣數量は此の時以來、其の需要を超過し、加ふるに銀の同一分量が高き稱呼を得たれば、其の結果として、貨幣價値減少せり」(p. 67) と謂へり。斯く彼れは明白に需要側を寓目せりと雖、需要なる用語に對し

枝葉に走らせ、本稿の根幹を漠然たらしむるの惧れあれば、敢て茲に論ぜず、唯彼れの見解汎く傳唱せられ、供給偏重の機運を釀せりと言ふに止めん。(彼れの影響の認知せらるゝ最初の載籍は、佛國に於ては Discourse sur les causes de l'extrême cherté qui est aujour'dhy en France et sur les moyens d'y remedier (1574) 英國に於ては A Compendious or brief examination Certayne ordinary Complaints of our Countrymen in these our days: which although they are in some part injust and furinolous throughly debated and discussed by W. S., Gentlemen 1581. なり)

斯くて爾來供給偏重の風熾烈なるものありしが、轉て需要寓目の論者の出現を見るに及び、這般の傾向は遮止せられ、爰に貨幣價値論上需要供給の法則は生誕するに至れり。而して此の端を啓ける者、惟ふに John Law なる可し。

明晰なる說明を下すことなし。Sewall の「彼れは需要に對し明晰なる觀念を附與せず、唯一般の方法にて欲せられたる數量を意味する事を暗示せるのみ」(Theory of Value befoue Adam Smith. p. 67) てふ評語は異議なく首肯せらる。

彼れに依り開かれたる這般の路は、軈て彼れの秘書官 Melon の辿る所となれり。彼れは「貨幣增加に歸因する高價は普遍的にして、商業界に到來する百般の事物、即ち貨物、商品、運賃、勞銀等の上に招來せらる」。(p. 723) と論じて、貨幣供給の影響を認諾したる後、之に隨伴して需要の變動繼續せずば、其の影響の一層顯著なるべきを說けり。以爲らく「「亞米利加發見以來、歐洲に輸致せられたる金銀量は、若し商業の大膨脹が商業國となれる國數に比例して交換要具に對する需要を增大せしむる事なかりせば、其は貨幣稱呼の引上げと關係なく、而も之と同一定する要因なるなり。而して彼に從へば、這般の貨幣量の增減は、貨物量の增減を隨伴せざる限り、貨幣價値の騰落となるなり。貨物購入の爲めに呈出せらる可き貨幣量を決定する三項目中、「人々の其に對して爲す需要」とは「貨物を購入せんとする欲望」にして、究竟彼れの所謂「貨幣を費消せんとするの願望」(the desire of spending the coin) に歸着し、「需要者能力の程度」とは要するに貨幣所有量に外ならざるなり。而して彼れは前者を强調するの餘り、後者を全然無視したり。之 John Wheatley をして彼れの見解を駁して、「需要は恒に一般支拂能力に由り調整せられ、所有の欲望に由らず」(Remarks on Currency and Commerce, 1803 p. 35) と言はしめたる所以なり。

彼れは流通場裡に到來する貨幣量の增減が物價の騰落を剔致すべきを認むる者なり。而して其の貨幣量を決定する要因は「貨幣を費消せんとするの願望」なりとなすなり。斯く彼れは金貨幣量が直ちに物價に影響を及すと言ふに反對す、此の理は等しく第一項即ち貨物量にも適用せられ、貨物は、市場に到來せる限りに於て、物價に影響を及すとなせり。(ch. XXVIII. BkII. vol. I.) 論じて茲に至れば、讀者は後人 J. S. Mill の「貨幣の供給とは人々の手離さんと欲しつゝある其の數量にして、――貨幣の需要とは販賣の爲めに呈出せらるゝ總ての貨物より成る」(Principles of Political Economy. Asheley ed. p. 490) てふ言說と相去る一步なるを感ずるならん。

以爲らく「鑄貨量增加は如何なる結果を生起するや。需要上昇 (rise of demand) 及び需要增大 (augmentation of demand) の孰れの場合に於ても、其に比例して鑄貨は流通場裡に流入す可き結果を招來するを得たるならん」(Ibid.)。

如上の陳述と一見其の趣を殊にするも、其の奧底に於て相通ずる所のものは Steuart の說なり。彼れは價格決定の法則を貨幣論劈頭に於て要約揭示せり。曰く、「諸物件の價値は諸般の事情の總和に依賴するも、之を四大項目の下に一括する事を得。一、被評價物件の數量二、人々の其に對して爲す需要三、需要者間の競爭四、需要者能力の程度是なり」(p. 527. ch. I. BkIII. vol. I) と。斯くて彼れは物價は貨幣數量に依り調整せられず、其は「貨物と人類欲望との相對的比例に依り決定せらる」(p. 528) と論じたり。

如上の要約を一見せるのみにては、讀者或は彼れの貨幣價値に關する眞意を察知するに苦しむならん。彼れの所謂四大項目中の第二項以下は貨物購買の爲めに呈出せらるゝ貨幣量を決定する要因なりとなすなり。斯く彼れは金貨幣量が直ちに物價に影響を及すと言ふに反對す、此の理は等しく第一項即ち貨物量にも適用せられ、貨物は、市場に到來せる限りに於て、物價に影響を及すとなせり。(ch. XXVIII. BkII. vol. I.) 論じて茲に至れば、讀者は後人 J. S. Mill の「貨幣の供給とは人々の手離さんと欲しつゝある其の數量にして、――貨幣の需要とは販賣の爲めに呈出せらるゝ總ての貨物より成る」(Principles of Political Economy. Asheley ed. p. 490) てふ言說と相去る一步なるを感ずるならん。

以爲らく「鑄貨量增加は如何なる結果を生起するや。需要上昇 (rise of demand) 及び需要增大 (augmentation of demand) の孰れの場合に於ても、其に比例して鑄貨は流通場裡に流入す可

し。唯二者次の點に於て異るのみ。前者の場合は供給之に比例して增加せざる可きを以て、物價を騰貴せしむるの效果を有す。後者の場合は供給之に比例して增加す可きを以て、物價は依然たる可し。此は富の增加が需要上昇か需要增大か孰れか一の結果を生ずる場合に於ける結果なり。然るに、此の時に際し、需要狀態にして變ずる事なからん乎、鑄貨增加量は恐らく藏匿せらるゝか、金銀器に變ぜらるべし。其の所有者は彼等の消費を增大するの念なし、況んや其の貨幣を讓與するの感情に驅らるゝことなければ、彼等の所有量の何等の影響を誘致せざること、猶其が依然鑛山に埋沒せられたるに等し」。(p. 400. ch XXVIII. BkII. vol. I)(茲に供給又は需要とは貨物に就いて言ふなり。需要上昇と需要增大との差異は競爭の有無に懸る)「貨幣數量をも下すこと能はず。何者彼等が彼等の富に比例して彼等の支出を膨脹せしむとは限らず、又縱令へ彼等之を行ふとも、其の附加せる需要にして之に相應せる供給を生起せしむる時は、物價は忽ち舊平準に復歸す可し」。(p. 413)と。

以上縷述し來れる所より、吾人は Law. Melon, Steuart を通じて、貨幣價値は需要供給の關係に由り支配せらるとなす思想の流れつゝありしを識れり。然れ共、竟に吾人は彼等より是等二語の明截なる意味を聽くこと能はざりしなり。唯吾人の推知し得たる所は、供給に就いて、彼等は全然流通速度を顧眄せざりしこと、Law. Melon は貨幣數量を流通場裡の夫れに限局するに至らざりしこと、需要に就いては、Law. Melon の需要者の能力に想到せざりしこと、Steuart は貨物に對する需要に就いては詳述し何等言及せざりしことのみ。

三

貨幣の自然價格は其の生產費に依賴し、其の市場價格は需要供給の關係又は唯單に供給のみに由り調整せられ、然も後者は前者に歸向せんとする傾向を有すとなす說の研究

參考書

Rice Vaughan: A Discourse of Coin and Coinage: The fierst Invention, Use, Matter, Forms, Proportions and Differences, ancient & modern: with the Advantages and Disadvantages of the Rise or Fall thereof, in our own or Neighbouring Nations: and the Reasons. (1673) (A Select Collection of Scarce and Valuable Tracts on Money, from the Originals of Vauhan, Cotton, Petty, Lowndes, Newton, Prior, Harris and Othens. Printed for the Political Economy Club 1856 に據る)

Joseph Harris: An Essay upon Money and Coins, (1757-58) (同上)

Sir William Petty: A Treatiese of of Taxes and Contributions (1662) Quantulumcunque concerning money. (1682) (The Economic Writings of Sir. W. Petty. Hull ed. 1899 に據る)

Richard Cantillon: Essai sur la Nure du Commerce en Général (1755) (Essai sur le Commerce, reprinted for Havard University, 1892 に據る)

自然價格及び市場價格なる二語は、スミス以前に在りては、種々の意義を表現したり。從つて吾人は第一に此の二語の意義を闡明するの要あり。自然價格と市場價格との對立は又內在價値と外附價値との對立として現はる。內在價値と外附價値とは、其の當初に於ては、貨幣の素材價値と表面價値との意義に使用せられたり。是、敎會法學者及び民法學者が貨幣の品位量目を bonitas intrinseca、其の稱呼を bonitas extrinseca と呼稱せるに出づ。例へば、Vaughan は近接せる諸國民の普遍的承允が貨幣の素材に對し附與したる價値を intrinsical value と呼び、一君主又は一政府の任意に附與したる稱呼を extrinsical value と呼べり。「造幣者は金銀の此の普遍的

價値をば、其が貨幣の內に在る時も、內在的と呼び、政府の記號、命令の印刻に憑依する地方的價値をば外附的と稱す。茲に、貨幣は其の含有する金銀の品位量目に等しき內在價値を有すと言はる」。(p. 12) 然るに、Petty は、自然價格を以て、不斷に動搖して歇まざる現實價格の外に立つ必然永續的の價格を意味す。而して其の決定原因を投下勞働量に覓む。(彼れは貨幣の現實價格即ち市場價格を支配する諸般の事情の何たるやに就いて直接に說明することなし)「人若し一ブッセルの穀物を生產し得ると同一時間に、秘魯の地中より銀一弓を倫敦に輸致するを得ば、一は以て他の自然價格たる可し。今若し一層便易なる新鑛の發見に因り、彼が從來一弓を得たると同じ勞働を以て、銀二弓を得たりとせん乎、他の事情等なき限り、穀物は從來五志なりしに對し、十志を價するに至る可し」。(pp. 50-51) 貨幣の自然價格が其の生產費に依賴すとの說が Petty に始まること上述の如しと雖、貨幣素材の生產費が貨幣價値の高低を惹起すとは、是より先既に Vaughan により說かるゝ所なり。曰く、「現今地中より採掘せらるゝ殆んど凡ゆる銀は西印度より到來す。其は必ず一度西班牙に輸致せられたる後、東方の諸國に分散せらる。是等諸國は銀に高價を附することに由り之を自國に齎らす。今若し英國外の如何なる地にも毛織物なかりせば、諸外國は、該物件運搬の時間、運賃及び危險に關する增加分を原價に附加せざる可らざるを以て、英國よりの距離の遠近に比例して、英國に於けるよりも高價を支拂ふに非らざれば、毛織物を得ること能はざる可し。銀に就いても亦然り。西班牙より其を自國に齎らす凡ゆる國は、西班牙よりの距離の遠近に比例して、より高き價格を附すること必然なり」。(pp. 88-89) と。斯く未だ Petty に在りては、唯單に自然價格の決定原因を生產費に覓めたると言ふのみにして、市場價格の決定原因を需要供給の法則に覓めず、況んや前者を後者の歸向中心點となすが如きことなかりき。(此の外、Galiani の如く效用並びに稀少性に由り決定せらるゝ價値を自然的內在的價値 (Valone intrinseco e naturale) と呼稱せるあり、又 Locke は銀の內在的價値を一般の承認に由り其の上に設定せられたる估料なりとなせり)。然るに Cantillon は Petty に倣ひて內在價値を其の素材の生產に要したる土地及び勞働に覓めたるも、而も更に一步を進めて市場價格決定は需要供給の法則に依賴すと斷定し、又市場價格は正常社會に於ては內在價値に接近すと喝破せり。以下之を述べん。

彼れに從へば、貨幣は其の職能を果す爲めには一般財貨の經濟價値と同一範疇に屬する價値を具有せざる可らず。「貨幣即ち價値の共通尺度は、土地並びに勞働の價格に於て、眞實に又內在的に人々の交換に於て提供する財貨と等しからざる可らず。之なくんば、貨幣は想像的價値 (valeur imaginaire) を有するのみならん。之を例せんに、縱令へ君主又は共和國が這個の眞實的內在的價値に非ざる或物件に對し國內に於ける通用力を附與するとも、諸外國の之を受領せざるのみならず、國人すらも亦眞實價値の欠如を知悉するに至れば之を拒否す可し」。(pp. 147-148) 此の見解より生ずる當然の歸結として、彼れは一般財貨に於けると等しく、其の眞實價値を其の素材の生產に要する土地及び勞働に覓め、其の市場價格を需要供給の法則に依賴せしめたり。「金屬の內在的眞實價値は凡ゆる物件の如く其の生產に要する土地並に勞働に比例す」

（p. 127）金屬の市場價値は凡ゆる貨物及び商品と等しく或時は內在價値以上に昇り、或時は內在價値以下に降る。即ち其は金屬の豐富又は稀少に比例し、其の消費に隨伴して變動す」（p. 128）更に又彼れの貨幣本質觀よりして彼れの一般財貨に就いて說ける次の一節は等しく金銀にも適用せらる。「物件の內在價値に變動あること無し。唯財貨の生產を一國の需要に適合せしむるの不可能なる一事は市場價格の日々の變動、不斷の進退張弛を生起す。遮莫善良に整頓せられたる社會に於ては、消費の充分に恒常統一的なる財貨の市場價格は內在價値より乖離する事遠からず」（pp. 38-39）

斯く彼れは內在價値の決定原因を土地及び勞働に覓めたるも、然も此二要素の孰れか一方を以て物件の價値を測定するを便利とせる Petty の思想を踏襲し、精錬し以て最下等の勞働の價値は勞働者の生活維持に必要なる土地生產物の價値の二倍に相當すと論斷するに至れるは一般經濟價値論に於て必ず紹介せらるゝ所、其は等しく貨幣の內在價値にも適用せらる。（pp. 40-55）又彼れは市場價格を需要供給の法則に依賴せしめたるも、需要に就いて何等明晰なる觀念を表示せず、或時は唯單に工藝上の用途のみを思考し、或時は貨幣上の需要を强調重視したり。之に反し、供給に就いては可成り詳細なる論述を試みたり。就中、彼れが貨幣の流通速度を以て貨幣價値決定原因となしたる事實は正に吾人の注目に値す。固より流通速度は旣に Petty, Locke, Law, Berkeley 等の寓目する所なれ共、貨幣價値に關聯して之を說けるは彼れを以て嚆矢となす可し。

「凡ゆる人は市場に於ける銀の豐富又は其の增加が百般の貨物の價格を騰貴せしむるを認諾す。二世紀此の方、亞米利加より歐洲に輸致せられたる銀の數量は經驗上此の眞理なるを證明す」（p. 212）「吾人は旣に市場に於ける銀の流通の加速度即ちより大なる速度は或る程度迄現實の銀增加と等しきを說けり」（p. 213）（彼れは先きに第二篇第四章に於て流通速度を詳述せり。然れ共、之は Locke 其の他の論客と等しく貨幣必要額の問題に關聯しての事なり、然るに上揭の一節は貨幣價値に及す影響の等しき事を意味す）凡ゆる外國に製造品を供給する帝國又は王國が外國より恒に差額丈け銀を收むる如き商業を營むとせば、流通額は外國よりも著大となり、銀はより豐富となり、其の結果土地及び勞働は徐々に高價とならん。斯くて這般の國家は、此の情勢の繼續する限り、凡ゆる商業に於て多額の土地及び勞働に對し少額の土地及び勞働を交換す可し」（pp. 208-209）（彼れは第二篇第五章に於て都鄙の間に物價の差異の存在する事を明細に說明し、都市就中首府に於ける高價は貨幣流通額の大なるに歸因すと斷定したる後、最後に之を對外關係に適用し上揭の言說をなせるなり）

此の外彼れは第二篇六七八の三章を通じて金銀の增減に就き論述し、就中 Jevons を驚嘆せしめたる第六章に於て金銀鑛發見の物價に及す影響を細敍したり。然れ共彼れは決して Locke の如く貨幣の市場價値を以て特殊の場合となすものにあらず。兩者は貨幣本質觀を根本的に異にす。彼れが金銀增減の物價に及す影響を論述する所一見 Locke の陳述と相似たるも、然も彼れが市場價格に於て Locke の思想を踏襲せりと臆斷するが如きは甚しき謬見なり。彼れが Locke 並びに其の流れを汲める人々の貨幣價値論を紹介したる後、「惟ふに市場に於ける諸

物件の價格が市場に於ける其の數量と銀の數量とに比例すと一般に信憑す可からず」（p. 154）と言へるは這個消息の一斑を露呈せるものと言ふ可し。（彼れは殆ど偶然的に「金銀は他の商品及び穀物と同じく、人が其に認むる所の價値に比例してのみ、費用を投じ生産せらる」（p. 149）と言へり。然れ共此の偶然的片語を以て如上の彼れの主意を覆すこと能はず）。

彼れの見解は軈て Joseph Harris の傳承する所となりぬ。彼れの貨幣價値論は前人諸般の見解を攝取敢行するに汲々たりし者なり。彼れは Cantillon に倣ひて自然價格と市場價格とを對立し、前者を後者の歸向中心點と觀、更に自然價格の決定原因を土地及び勞働（主として勞働）に覓めたるも而も進んで市場價格に論入するや Cantillon を去りて Locke, Hume, Montesquieu の一派に就けり。即ち彼れは其の決定原因を貨幣數量のみに覓め、以て貨幣貨物二量をば等置關係に置けり。彼れは自然價格に於ては諸多の金屬論者と等しく貨幣を一の商品と觀たり。然るに、市場價格に入るや、貨幣を手段と看ることに由り、これに別個の地位を與へたり。從つて彼れの見解は明らかに前後撞着すと言はざる可からず。彼れは先づ Cantillon に倣ひつゝ、之が決定原因を土地、勞働に覓む。以爲らく「貨幣が其の尊嚴を持續し、價値尺度として一般の尊敬を保持せんが爲めには、其は餘りに一般的ならず、廉價ならず、過多ならず、又任意に增加する能はず、即ち土地勞働に多大の顧慮を拂ふに非ざれば、發見し難き素材又は貨物より成るを要す。――何者、如何に反對の事實を摘示せんと肝腦を絞り、將又反對の事實を思考する者ありとも、然も貨幣は他貨物の如く、其を獲得するに必要なる勞働及び熟練に比例し、其の豐富に反比例して其の價値を有するに至ればなり」（p. 373）然れ共、貨幣價値は市場に就ては、其の素材の生産費と歩調を等しうするものにあらず。然れ共又更に市場價格は其の生産費に歸向せんとするの傾向を有す。「鑛山の作業依然繼續せられ、消費を凌駕して地金の分量增加する時は、鑛山所有者の支出同一なるか、或は寧ろ增大せるに拘らず、若し該增加量にして藏匿せらるゝことなく、貨幣として流通場裡に流入するか、又は金銀器に製造せらるゝ時は、此の地金の一定部分の價値は下落す可し。是、其の一定部分は其の舊流通裡に於けるよりも、金量の小部分を形成するに至ればなり。鑛山所有者は少額の利潤に甘んずるか、又は彼れの作業を其の所産の消費量に適應せしめざる可らず」（p. 394）と。

斯くて次に彼れは市場價格に論及し、先づ Locke の影響を露呈しつゝ曰く、「汎く全貨物と交換せらるゝ貨幣に對する需要は無際限なり。されば一方全貨幣量は其の全欲望を超過することなく、他方全欲望は全貨幣量を超過せず、否之を以て甘んぜざる可からず。蓋し貨幣は吾々人員に比例せしむべき食物衣服の類と異ればなり。故に貨幣が一社會全體を通じて普及するや否や、貨幣全流通量は同一圈内の賣買貨物の全量に等しかる可し」（pp. 390-391）斯くて Hume に倣ひつゝ、「休止狀態即ち流通及び取引外の貨幣貨物は茲に考慮に加へず」（p. 391）と論じ、更に論歩を進め、Montesquieu に倣ひつゝ、「金銀が世界の貨幣を成す限り、該金屬の全量は之と交換せらるゝ世界の全貨物と其の價値に於て等しかる可し。一方の全部は他方の全部なる如く、一方の一定部分は他方の一定部分たる可し」（p. 391）と說けり。「されば一國に於ける貨幣

の一定量、若しくは一定額の價値は、流通貨幣の全額又は全量が貨幣と交換せらるべき其の國の貨物全體に比例して或は大或は小なるに從つて、或は大或は小なり」。(p. 391)

以上の如く Petty, Cantillon, Harris を通じて生誕し來れる自然價格並びに市場價格の對立は、爾てスミス以後正統學派の踏襲する所となりぬ。固より是等兩者の決定原因に就ては、Ricardo, Senior, Mill 等の諸論者殆んど悉く其の所見を多少異にする所ありと雖、二者の對立を其の脊梁となせる一點に至りては即ち一なり。(小泉信三教授の「リカルドオの價値論」(一)(本誌第十六卷第二號)に於ける上述諸家に關する論述を參照せらる可し)

III

貨幣價値は效用並びに稀少性に依賴すとなす說の研究

一般經濟價値論上に認めらる主觀客觀の對立は等く貨幣價値論上に於ても認知せらる。

前三節に亘り客觀的貨幣價値論を檢討したる吾人は、次に主觀的貨幣價値論を檢覈せんと欲す。スミス以前一般經濟價値論に在りては、主觀的傾向は縱令へ其力は微弱たりとも恒に到處に閃きつゝありたり。遠くは Aristotle より降ては伊の Davanzati, Montanari, Galiani, 英の Barbon 佛の Turgot, Condillac 等皆然り。然るに貨幣價値論上に在りては些か其の趣を異にす。其の貨幣本質觀より生起する當然の歸結として、貨幣價値論上吾人に論議に上るは Galiani, Turgot, Condillac に過ぎざるなり。

Galiani に從へば貨幣價値は結局其の素材の商品としての價値に外ならず、「幾多の論客は金銀が貨幣としての用途、吾人の叢氣、又は國民の承允の執れよりも發生せざる眞實的內在的價値 (Vers valore intrinsecs) を有すてふ余の論述を認むるならん。——次に余は彼等が最初に這般の內在的價値を有したるのみならず、其が貨幣としてよりも地金銀として遙かに多く欲求し、使用せらるゝを以て、貨幣として使用せらるゝ際にも依然其を有す可きを理解せしめたり」。(pp. 105-107. Capo III. Dimo trazione che i metalli hanno prezzo per l'uso che prestano comme metalli assari più che comme moneta. Du caloli che confenano questa verità) 從つて彼れの貨幣價値論は一般經濟價値論に於て窺知せらる。彼れの一般經濟價値論は著名なる一節、即ち Capo II. Dichiarazione de principe onde nasce il valore delle cose tutte. Dell'utilità e della rarità, principe stabili del valore. Si. responde a molte objeczioni. に於て窺知せらる。「價値は比率なり。而して其は效用並びに稀少性なる名辭の表現する二個の比率より成る。——人生に有用なる要素たる空氣と水が其の稀少性を缺けるが爲めに、何等の價値をも有せず、之に反し、日本の海岸より齎らす一甕の砂は假令稀少なるものなりとも、特殊の效用なかりせば毫釐の價値をも有せざる可きは明白なり」(pp. 58-59) 斯くて彼れは效用並びに稀少性の性質

の檢討に論歩を進めたり。而して彼れに從へば效用とは吾人に幸福を齎らし得る物の性能にして、稀少性とは物の分量と其の使用との間に介在する比例に外ならず。

斯く彼れの內在價値として論ずる所のものは使用價値に外ならず、第一章に於て說ける所より觀るに彼れは市場價格を認め、其は需要供給の關係に由り律せらるゝとなせるものゝ如し。彼れは供給の增加は貨幣價値の下落を來すも、其の結果として貴金屬としての用途增加し、又採掘減少を誘致するを以て、其の下落は索制せらるとなせり。又彼れは第四章に於て貨幣素材たる金銀が耐久性を失ふ時は、其の供給減少して貨幣價値の下落を索制す可しと論じたり。(pp. 44-51. 116-123)「銀の產出なき印度は忽ち歐洲に存在せる過剩の該數量を吸引せり。其の結果亞米利加より吾人に齎らす數量に比例して、貴金屬の價値を變動せしめ、然も遙かに其を減少せしむるに至りぬ」。(p. 46)「金が（腐蝕し易しと云ふ）不利の下に置かれたりとも、猶且つ從前より低く評價せらる可しとは言ふを得ず。何者其が軟柔毀損し易きに隨伴して、愈々益々尊重せらる可きを以てなり」。(p. 123)

如上の Galiani の見解は聽て Turgot により佛國に移植せられたり。彼れは直接に貨幣價値に論入する事稀れにして、恒に貨幣は貨物に外ならざるを强調力說し、以て吾人の一般經濟價値論を參照せんことを覺めたり。Reflexions sur la formation et la distribution des richesses に於ては貨幣本質觀を論述するのみにして僅かに一節を除いては貨幣價値は勿論一般經濟價値にも論入せず、Valeurs et monnaies も亦貨幣本質觀と一般經濟價値論を論述せるのみにして中絕したり。吾人は却つて之れが明截なる陳述を靑年當時の一書簡中に發見す。Reflexions に於て說ける所は (XXXI-XLVIII) 貨幣は本質的に貨物に外ならざる事、從つて兩者の價値を調整する理法は一なる事を最も鮮明に表現したり。「凡ゆる貨物は貨幣の二本質的特性即ち價値の測定並びに表現なる性質を有す。此の意味に於て凡ゆる貨物は貨幣なり」。(XLI. p. 28)「逆に凡ゆる貨幣は本質的に貨物なり」。(XLII. p. 28)「無數の異れる原因は、相協力して、或は各自相互に、或は銀と比較せられたる時の諸貨物の價値を各瞬間に決定し、以て不斷に動搖せしむ。同一の原因は或は各個の貨物の價値と、或は現實に商業場裡に存する他價値の總量と比較せられたる銀の價値を決定し、且つ變動せしむ」(XLVIII. p. 31) 又 Valeurs et monnaies に於ては、彼れは貨幣が秤量制度より個數制度に進み、更に聽て monnaies réelles と monnaies de compte とを生ずるに至る經過を詳述したる後、monnaies de compte は monnaies réelles に憑依し、結局其の包含する所の金銀の品位重量に依賴すとなせり。

斯くて彼れは經濟價値論に論入せり。今茲に彼れの見解を要約啓示すれば、Valeur estimative は二個以上の貨物の效用を（彼れは之を價値と呼べり、——Il le judge propre a sa jouissance, il le trouvera bon, et cette bonté relative pourrait absolument être appelée valeur, p. 80）比較し、其の間に尊重の順位を立つる事に由り發現するものにして、其の決定原因は現在の欲望に對する適合性と將來の欲望に對する適合性と稀少性の三者に依賴し、(pp. 80-82) Valeur appreciative は valeur estimative の平均に外ならざるなり。(p. 86)

此の價値論が等しく貨幣に適用せらる可きは

前述せる彼れの貨幣本質觀より觀て明白なり。然も彼れは前述せる如く貨幣價値論に適用せる事甚だ稀れにして、吾人は辛うじて次の二引用をなす事を得可し。即ち彼れは前掲の書簡中に於て曰く、「銀が一般他貨財の共通尺度たるは貨物としてなり。記號たらず。即ち其は該金屬の一片に附與せられたる勝手氣儘なる約定に由るものに非ず、該金屬が貨物として諸般の形式の下に使用せられ得る其の性能に基きて發生し又貨幣としての使用に由り少しく增大せる Valeur vénale を有するより、吾人が恒に該金屬に價値を認むるが爲めなり。されば金は其の稀少性より其の價格を取得し、又同時に商品並に尺度として使用せらるゝは不利ならずして、却て此の二用途が其の價格を支持す」(p. 98)又 Reflexions 中 XLVII L'usage d'or et de l'argent comme monnaie en a augmenté la valeur comme matiere し、又技藝を有するに至り、斯くて彼等が金屬を諸般の用途に充てたりと假定す。斯る假定の下に於ては、金屬は彼等にとりて彼等の欲望に關係する價値を有し、其の稀少なるか豐饒なるかに隨伴して、否寧ろ彼等の其の稀少豐饒に就いて有する意見に隨伴して、高低する價値を有する商品なり」。(p. 284)「人若し金屬の適する用途を識らざれば、該金屬は全然無效用なる可し、斯くて人は之を探求せず、砂礫土塊の間に遺棄して顧みざる可し。此の時其は價値なかる可し。然るに一度其の效用を認知するや、人之を探求し、其の稀少なるに隨伴して愈々之を熱望す可く、斯くて其は軈て好奇心の對象となる可し。此の時其は新たなる價値を獲得すべく、其の價値は好事家の數に比例す。稀少にして好奇心の對象なりと思料せらるゝや、其は軈て裝飾品となる可く、斯くて此の新たなる用途は其に

なる一節を設けて曰く、「各人が彼れの過剩生産物を他貨物よりも金銀と交換せんと欲する其の熱心は商業場裡に於ける是等二種の金屬の價値を增大せしめざるを得ず」(p. 30)と。斯く彼れは貨幣價値に論入する事少しと雖、如上の二齣克く彼れの貨幣價値に關する見解を忖度せしむ。

Turgot により樹立せられたる這般の主觀的傾向を助長しつゝ、其の所說の透徹に於て、彼れに一歩を進め得たる者を Etienne Bonnot de Condillac とす。彼れに從へば貨幣は一の商品に過ぎず、其の價値は主として其の素材たる金銀の商品としての價値に依賴す。從つて貨幣價値の研究は先づ其の素材の商品としての價値檢討より始めざる可らず。爰に於て乎、彼は Des Métaux considérés comme Marchandise なる一節を設けて曰く、「我が土民が金銀銅鐵を認知新たなる價値を附與すべし」。(p. 285)と。之を要約すれば彼は商品としての金屬の價値は效用即ち用途換言すれば吾人の欲望に憑依し、從つて新たなる用途は新たなる價値を附加し、又其の稀少豐饒に比例して吾人の欲望は增減するを以て、其の稀少は其の價値を大ならしめ、其の豐饒は其の價値を小ならしむと解したるなり。

斯く論じ來りて、彼れは節を改め貨幣となれる金銀も依然商品たる可く、從つて貨幣としての金銀價値も依然如上の法則に支配せらる可きを說く。即ち Des métaux considérés comme monnaie に於て曰く、「貨幣となるも金屬は依然商品たるを免れず、其は新たなる稱呼を附與せらるゝも、其の恒に在りし所のものに外ならず、若し其が商品としての價値を保持せずば、其は貨幣としての價値を有せざる可し」。(p. 289)と。斯くて曰く、「貨幣として用らるゝや、

金銀は新たなる用途、新たなる效用を得來りて、其は新たなる價値を取得すべし」。(p. 290)と。斯く甚だ頑强なる金屬主義的見解を流露し來りて最後に、彼は反對論者の牙營に迫る。曰く、「吾人は本節を終るに當り、貨幣を諸物件の價値の表彰なりと思料する論者は、貨幣をば氣儘に選定せられたる象徴にして、發明による價値を有するのみとなすものゝ如きを以て其甚だ不正確なることを一言せんと欲す。若し彼等にして該金屬が貨幣たるに先ちて商品たりし事及び其は依然商品たる事を認知せば、彼等は其が凡ゆる價値の尺度として適當なるは、其が凡ゆる發明より獨立して、夫自體價値を有するが故なるを悟るに至らむ」。(p. 290)と。斯く金銀の價値を論じ來つて彼れは、他物件が交換に於て相互に他の價格を形成すると等しく、其と他物件とは互に價格をなすを許き、其の價格は他物件に於ける如く其の饒多稀少及び競爭の有無大小に由り支配せらるゝとなせり。即ち曰く、「吾人は先に交換に於て物件は相互に他の價格を成すと謂へり。而して吾人は茲に銀が彼の購入せる物の價値の尺度たらば、其の購入せる物の價値は等しく銀の價値の尺度たる可きを謂はんと欲す」。(p. 291)と。彼れの見解は更に降つて De la valeur comparée de metaux dout ou fait les monnaies に入るや愈々明晰を加ふ。即ち、「貨幣として使用せらるゝ金銀銅は他物件の如く彼等の效用に憑依する價値を有し、其は吾人の或は稀少なり、或は豐饒なりと判斷する所に隨伴して、或は增加し、或は減少す」(pp. 315-316)と謂へり。以上の如くして Galiani により貽されたる胚子を培養しつゝ、佛國に於ける主觀的傾向を樹立したる Turgot, 並びに效用及び稀少性の二元間に存する關係を體得したる最後效用說の先蹤 Condillac の所說はスミス以後も佛國諸論客の繼承する所となりぬ。固より客觀的傾向を加味し來れる一事は充分に認知せらるゝも、（前述貨幣價値論の影響浸潤の結果として）而も猶評價主體强調の傾向は其の胸底深く流れつゝありたり。

五

吾人は以上三節に亘り金屬主義貨幣價値論の概略を檢討し了れり。從つて吾人は茲に彼等の見解を要約揭示すべし。〜彼等に從へば、

貨幣價値は主として其の實體價値より成立すとなす。然らば貨幣の實體價値とは何を意味するや。茲に貨幣の實體價値とは其の素材の商品として有する價値に外ならざるなり。茲に於て乎、彼等は貨幣價値論に於ても經濟價値論に於て辿れる所を辿れり。即ち彼等は

貨幣價値は一般財貨を支配すると同一の理法に由り律せらるとなせり。從つて彼等は或は評價客體を强調する事に由り客體的貨幣價値論を擧じ（第二節、第三節）或は評價主體を高調する事に由り主觀的貨幣價値論を唱へたり、（第四節）一部の論客は貨幣が貨幣官能を果す事に由り生ずる價値、所謂職能價値を認めたるも、然も這般の用途も亦唯單に裝飾用、工藝用の夫れと等しき、用途に外ならずとし、而も之を輕視し、以て前述の立場を固守したり。之を要するに、彼等は全く「貨幣は實體價値を有するの故に貨幣官能を營み得」てふ基礎の上に立つものとす。

然るに第一節に於て述べたるが如く、貨幣は次第に其の實體より作用に向つて發達するの傾向を有す。貨幣官能の發達は愈々益々貨幣に對する其の內容の直接的意義を減殺せしむ。此の傾向は一部論者をして果して貨幣が這般の官能

を果す爲めに實體價値を必須條件とするやを疑しむるに至り、斯くて竟に彼等は

貨幣は實體價値なくして貨幣官能を營み得るものなり

と論ずるに至れり。而して此の見解を抱持せる者決して僅少ならざりしも、スミス以後現出せる金屬主義全盛の爲め遮遏せられて、學者の眼に映ずる事稀れなりき。然るに近時に於ける名目主義の擡頭と共に、次第に人々の注意を喚起するに至れり。然らば當時の論者の實體價値否定は貨幣の無價値となることを意味したるや。あらず。彼等は貨幣の所謂官能價値を認めたるものの如し。而も彼等は貨幣の手段たる事を飽く迄正視し、這般の價値を、財貨の價値と同一範疇に屬せしむる事なかりき。然らば更に、彼等は貨幣の實體的根基をも拒否せるや。あらず。彼等は價値感情の彼方に存する技術上の問題より之を必要となせり。（從つて後世に於ける Liefmann 流の見解はスミス以前の諸論者の上には其の片影をだも認めず）然らば次に彼等は貨幣が實體價値なくして克く貨幣官能を營み得るに至れる理由を那邊に覓めたるや。此の點漠として定かならず。或は「國家の權威」と言ひ、或は「國民の信賴」と言ひ、或は「國民の承允」と稱し、或は「文明の進歩」と稱し、其の眞意を捕捉するに苦しむ。從つて吾人は現今の眼より觀て如何に解するが合理的なりやに就て論じ得るのみ。以下順次之を述べん。

六

貨幣價値は國家の權威に憑依すとなす說の研究

參考書

Nicholas Barbon: A Discourse Concerning the New Money lighter. In Answer to Mr. Locke's Consideration about raising the Value of Money. (1696)

吾人は今 Barbon の見解に論入するに先だち中世に於て旺盛なりし貨幣價値法定論と Knapp 顯現以來、今や燎原の火の如く學界に傳唱せらるゝ法制的名目學說とを對比し、其の異同を鮮明ならしむるの必要を認む。第一に貨幣本質觀に於て、前者は Aristotle の影響の下に貨幣の起原を物々交換の不便に歸し、其の胸底に於て貨幣の實體價値を必要と觀たるに對し、後者は貨幣を以て國家法制の所產なりとし、貨幣は何等實體價値たるを要せずと論じ、以て之を金屬の基礎より解放したり。次に貨幣價値論上に於て、前者は國家克く貨幣價値（貨幣購買力）をも確定すとなせるに對し、後者は國家は唯單に貨幣各個片に稱呼を附與するのみとなす。此の點に關し、Knapp 並びに其の流れを汲める人々と Liefmann との間に一論爭の惹起せられたるは周く人の知る所なり。即ち Liefmann は Knapp が貨幣の購買力も國家の決定する所となせるが如く曲解して國家的學說を非難し、之に對し Knapp は其の著第二版以後卷末に於て、貨幣の購買力は貨幣の國家的學說の全然關知せざる所、一般經濟理論の問題に屬し、國家は貨幣の各個片に通用力、價値名稱の表示を附與するのみと釋明し、Helfferich, Bendixen 等は彼れの學說は貨幣價値の問題に關與せず、而も其は彼れの純法制的考察方法に隨伴する當然の結果なりと辯護に務めたり。固より中世に在りても、其の末期に至れば國家が貨幣購買力をも確定すとなすの不合理なるを說ける者なきには非らず。例へば吾人は之を St. Thomas Aquinas に、又 Molinaeus に認むと雖も、然も大勢は法定論に傾きつゝありぬ。斯くて此の傾向は近世に入るも全く衰滅するに至らず、Le Bret に Hermann

Coming に其の餘映を停めたり。

然らば Barbon の見解は其の孰れに屬するや。彼れが貨幣は其の實體價値に倚藉することなく、其は一に國家の權威に憑依すとなせるは、正に後世に於ける國家的學說の先驅を示せるものなり。而も彼れが貨幣價値も亦國家の決定する所となせるは中世に於ける法定論の謬見より脫する能はざりしものなり。洵に彼れは貨幣の本質をば、國家の權威を招引して說明し、以て時流に挺んでたると同時に、國家の權威を正當なる範圍に限局すべきを忘れ、以て時流に捉れたり。Sewall は彼れを評して曰く、「彼れは大なる一誤謬を犯せり。彼れは鑄貨の價値は政府に由り鑄貨に附せられたる刻印に依賴すと思考したり。此の謬見こそ彼れの述作が、其の偉大なる效績にも拘らず、陷れる曖昧模糊の根因なれと思料せらる」(Op. cit. p. 60)と。

彼れは自ら其の卷頭に於て自己の意見を要約揭示せり「「貨幣は其を鑄造せる政府の權威に依りて商業の要具たり。其の價値は各片の刻印容積に據り知悉せらる」(The Contentes)「貨幣は其の內容たる未鑄銀と異る。政府は貨幣各個片に對し、普通內在する銀價以上の確定せる價値を附與す」、(Ibid.)「人々の百般の他貨物に對し授受し契約する所のものは貨幣にして、貨幣に據りて凡ゆる他財貨の價値を算定す。彼等は各片內の純銀量よりも寧ろ貨幣の刻印、通價を注意す」(Ibid.) 更に其の本文に於て曰く、「貨幣は通常或金屬より成るも、然も其は絕體の必要よりも寧ろ便宜より出づ。即ち其の價値は公權威に由りて發生するが故に、其は便宜にして等しく僞造を豫防し得可き或他財に對しても等しく設定するを得べし。Guiney の或地方に於て貝殼を以て貨幣となせるが如き其の一例なり」(p. 13) と。更に降つて彼れの政府の附與すとなすは單なる稱呼にあらざるを露呈しつゝ曰く、「何物と雖、夫自體に於て價値又は價格を有せず、有ゆる物の價値が其の用より發生するの事實を以て眞なりとせんか、貨幣が之に對する用の大なるに基き地金若しくは印刻を保持する金屬以上の價値を有し、而して政府が商人及び工匠の其の財貨及び商品に對すると等しく、其の貨幣に對して價値又は價格を設定確保するの力を有するは敢て異とするに足らざるなり」(p. 27)「加之、其が政府の權威に據りて通用法貨たるの資格を賦與せられ、有ゆる人は之を收受するの義務あり、斯くて何人と雖、他の者が同一價値に對し再び彼れより之を收受せざるを得ざるを以て、之を受理するに由り損失を受くることあり得可らざるの事實は、更に貨幣價値に對する有力なる理由なり」(p. 28)と。

如上の引用より判斷すれば、彼れは明白に貨幣價値は國家の法定する所となせりと言はざる可からず。然れ共、爰に彼れの眞意那邊に存するやを疑はしむる一齣あり。即ち最後の一節 of Raising the Value of Money, with the Causes of it, and the Effects に於て、彼は「若し舊本位に從つて貨幣改鑄を行ふ時は、法律の嚴禁にも拘らず、鑄造せらるゝと共に鑄潰され、拉去せられ、斯くて貨幣は缺乏し、其の結果商業は休止の狀態に陷り、有ゆる貨物の價格は下落すべし」(p. 92) と言へり。貨幣數量の增減が物價高低を生起すとなす、此の一節より判斷すれば、彼れは決して貨幣價値は貨幣極印に依賴し、從つて更に公權威に憑依すとなせる者にあらず、吾人は彼れの貨幣價値なる用語は單なる稱呼を意味するものと解せざるを得ず。然れ共、此の見解は諸論客の反對する所なり。例へば Monroe

は「彼れは一國に於ける貨幣の缺乏は消費減少の結果として物價を下落せしむと言へり。將に擱筆せんとするに當りてなせる此の不手際なる容認は、彼れが價値確定を以て單に銀幾許を志と呼稱するやを意味し、物價を該志の流通量に依頼せしめたりと解すれば、恐らく矛盾なきを得べし。然れ共此の解釋は正當ならざるが如し。故に余は Barbon を法定論者に加へたり」（op. cit. p. 116）と言へり。

斯く Barbon は Valor Impositus の謬見に陷れるが如しと雖、彼れ以後の有ゆる論者は克く這個の誤謬より免るゝを得たり。（之と同時に彼等は貨幣に對する正當なる國家の作用をも沒却して省みざりき）吾人は幾多の論客が貨幣價値法定論の不合理を論難せるを聽く。Harris, Galiani の如きは特に一節を設けて之が攻擊に務めたり。斯くして貨幣價値の國家權威に憑依すとなす說は其の跡を絕つに至りぬ。（前揭 Barbon の載籍內容は高橋誠一郎敎授「ハリフィックス卿の貨幣改鑄を中心として喚起せられたる貨幣論爭」（其四）（本誌第十三卷第三號）（「經濟學史研究」自六八七頁至七一五頁）中に詳述せらる）。

七

貨幣價値は貨幣供給のみに由り支配せらるとなす說、換言すれば貨幣總量と貨物總量との間に相等性の定立せらるとなす說の研究

參考書

Bernardo Davanzati: Lezione delle Monete (1588)
Economisti Classici Italiani de economie politica, parte antic, tomo II. 1804. に據る）
Geminiano Montanari: Della Moneta (1680)（同上 (tomo III)）
C. de. S. Montesquiu: L'esprit des lois (1748) Pourrat Freres ed. 1834 に據る）
John Locke: Some consideration of the Consequences of the Lowering Interest, and Raising the Value of Money. In a letter to a member of Parliaments (1692) David Hume: Essays, Moral, Political, and Literary (1752) (ed. by Green and Grose Vol. I 1875 に據る）

最後に本節に於て論述せんと欲する學說は純粹なる意味に於ける貨幣數量說、又時には比例說と呼稱せらるゝものなり。此の一派に屬する人は手段としての貨幣を最もよく體得し、從つて貨幣素材の價値に遡及するが如きこと全然無し。斯く彼等が貨幣貨物相互間に何等の質的相等性の存在をも必要とせざる時、兩者の關係を測定手段たる貨幣間の比例が被測定對象たる貨物間の比例に反映すとなす事を捉へ來りて、彼等の貨幣價値論を打建つるに至れるは驚嘆す可き烱眼と言ふ可し。（Georg Simmel: Philosophie des Geldes. 1922 S. 101-128 參照）唯茲に問題たるはスミス以前の此の派の論客が貨物總量と貨幣總量との相等性定立の論據を那邊に覓めたるやなり。彼等は殆ど悉く或は明言して或は暗默の裡に「國民の承允」なる甚だ漠然たる論據に立てり。吾人は全く彼等の眞意をかゝる不充分なる用語しりして掬する能はず。Simmel が或る貨物の價値と或貨幣量の價値との相等性定立は單純なる因素の相等性を意味せず、特定の經濟圈內に於ける貨物總量を分母とする分數と貨幣總量を分母とする分數との相等性を意味し、而して此の相等性定立は實際的理由より貨物總量と貨幣總量とが相互に相等しと定立せらるゝ事に基因す。詳言すれば吾人が是等二個の範疇を取扱ふ實際的關係が理論的意識の裡に相等の形式に於て反映す、唯此は個々の商品と個々の價格との等置に對する普遍的基礎たる爲めに吾人に由り意識せられず、――斯く當該關係を基礎づくる普遍的素因の忘却せられ、事實上働くも意識的に働かざるは人間天性の一特徵を表示

す。一方には吾人の受容能力に制限ある爲めに、他方には意識使用上の力の節約の爲めに或興味の對象に附隨せる無數の方面性質の中恒に僅少の數のみ現實に注意せらると言へると比す可くもあらず。以下順次彼等の見解を檢討せん。

抑も這般の思想の纒を解ける者は伊太利の人 Davanzati なり。彼れは貨幣を定義して「貨幣は公の權威に由りて任意に鑄造せられ、而して國民の承允に由りて取引を容易ならしむる爲めに其の價格及び尺度たらしめたる金、銀若しくは銅なり」(p. 28) と言へり。即ち彼れの解說に從へば、爰に金銀銅と云へるは國民が貨幣たらしむ可く是等の三金屬を選みたるが故にして、(Ibid) 「國民の承允に由りて萬物の價格及び尺度たらしめたるもの」とは人類が這般の金屬を以て是等の用途に使用することに同意を與へたるが爲にして決して彼等が自然價値を有するが故にあらざるなり。(p. 31) 即ち貨幣が克く貨幣職能を果すは全く國民の承允 (accordo delle genti ——時に彼れは唯單に dalle genti と云ふ) に憑依す。斯くて彼れは言ふ「是等萬物の總ては各國民の承允に由りて既に生產せられたる金 (銀及び銅を含む) の總てに價す。是に於て乎、凡ゆる人類は彼等の缺感及び欲望の滿足の爲めに又幸福の享有の爲めに、總ての黃金を熱求す。各部分は總體の性質を具有す。(Le parti sequon la natura del tutto)」(p. 32) と。即ち貨幣全體と貨物全體とは等價にして、貨幣に由り測定せられたる凡ゆる貨物の價値は各個が全體に對して表す其の部分の比例に據り決定せらるゝなり。

此の思想を繼承したる最初の論客は等しく伊太利の人 Montanari なり。此の見解は其の著書の隨所に流露すと雖、主として cap. II. Della proporzione della moneta alle cose vendibili, considerata universalmente (pp. 40-57) に於て窺知するを得可し。彼れは「人若し何物をも欲求せず又欲望することなかりせば、彼等何の取引をか爲す可き。既に彼等にして取引せざれば、貨幣何の用途かある可き。是に於て乎、人類の欲望は物件の價値の尺度たり。而して貨幣は此の物件の價値に應當す。故に欲求若しくは欲望は物件の價値尺度たると等しく、貨幣價値の尺度なり。逆に又貨幣は物件の尺度たると等しく欲求及び欲望の尺度なり」。(pp. 42-43) と述べたる後「此の考究は吾人をして Bernardo Davanzati の意見に加擔せしむるに至れり。其は上記の個所に於て彼れが證せんと務めたる事、即ち商業場裡に於て彼等の間に存する人類の有ゆる貨物は、總括して考ふれば、商業場裡に於て彼等の間を流通する鑄造せられたる金銀並び銅に價すてふ理なり」。(p. 45) と言へり。斯く彼れは Davanzati の意見を踏襲すると共に、Davanzati が單に tutte questi 又は tutto l'oro (le con esso intendo l'ariento é l rame) と言へるに對し、tutte le commodità degli uomini che sono fra loro in Commercio. 又は l'oro, l'argento ed il rame coniats che pure fra loro corre in commercio と述ぶることに由り、一歩を進めたり。從來幾多の論者が此の重大なる改修を無視し、(Kaulla: Die Geschichtliche Entwicklung der Modernen Werttheorien. S. 112 の如き) 彼れは Davanzati の見解を文字通りに繼承せりとなせるは正當ならず。然れ共此の重大なる改修を Montanari 自身は殆んど氣附かざりしもの、如し。

次で彼れは此の理を明晰ならしめんとして、或は封鎖せられたる都市、或は他州より切離せられたる一州等種々なる場合に就いて論述した

り。「若し一都市が敵軍の包圍其の他の原因に由り封鎖せられ、長期に亘り他との商業を切離せらるれば、彼等が其所に發見する凡ゆる販賣物は其の價を變ず可し。若し彼等が許多の金銀を有し、而も僅少の貨物を有するに至れば、勢ひ該市民は彼等の欲する貨物を高値にて購入するに至らん」。（pp. 45-46）若し特定の貨物のみ尠少となれば、其の貨物のみ騰貴す可し。而も「此の場合に於ても、彼等がかゝる封鎖の下に商業場裡に發見する金貨其の他の貨幣は其處に彼等の發見する凡ゆる貨物と等價なる可し」。（pp. 46-47）

這般の思想を繼承しつゝ、其の陳述の鮮明に於て一歩を進めたる者を Montesquieu となす。彼れは貨幣本質論の劈頭に於て「貨幣は百般の貨物の價値を表彰する記號たり」（Tome. 2. chap. II. p. 206）と喝破したる後、次節に於て貨幣は其の材料の實體價値に倚存しつゝ發生し、次第に純粹なる象徴的意義を取得するに至る可きを說く「現實的貨幣（les monnoies réelles）と觀念的貨幣（les monnoies idealles）とあり。殆んど觀念的貨幣のみを使用する文明人は唯彼等の現實的貨幣を觀念的貨幣に轉換することに由りてのみ克く之を行ふ」（p. 210）斯く論じ來りて彼れは貨幣價値論に論入す「銀は貨物の價格なり。然らば如何にして此の價格は決定せらるゝや、換言すれば銀の幾許量に依り各貨物は代表せらるゝや。全世界に於ける金銀と貨物總量とを比較すれば、汎ゆる特殊の貨物は金銀全量の或部分と比較され得る事明確なり。一方の全部は他方の全部なる如く、一方の部分は他方の部分なり。現世界に存する貨物單に一個なるか、若しくは購入し得る貨物唯一個のみにして而も貨幣の如く分割し得と假定せん乎、此の貨物の一部分は金銀量の一部分と相對し、一方の半ばは他方の半ばに、一方の十分ノ一、百分ノ一、千分ノ一は他方の十分ノ一、百分ノ一、千分ノ一と對立す。然れ共人類間の貨物は總て一時に取引せらるゝものにあらず、又其表徴たる金屬即ち貨幣も總て一時に取引せらるゝものにあらず。故に價格は貨幣全體と貨物全體との複合割合、及び取引せらるゝ貨幣全體と取引せらるゝ貨物全體との複合割合に由り決定せらる。而して今日取引外の貨物及び貨幣も翌日は取引場裡に到來する事あるべきを以て、價格決定は根本的に貨物全體の貨幣全體に對する比率に依賴す」（pp. 214-215）

爰に全貨幣量と其の特定部分量即ち價格との分數に照應す可き貨物の分數は、貨物の單純なる數量的關係を意味するや、將又貨物の價値其のものに於ける關係を意味するや。若し貨物側に於ける分數的關係が何等其の內容に關連せず、單に外延的關係に止るとせば、貨幣特定部分量即ち價格は何等貨物の價値を表現せざるに至らん。而して彼れは貨物の分數的關係を以てその價値との關係を意味せり。固より彼れは此の點に關し直接何等言明する所なかりしも、其の次節に說く所は正に吾人の論斷を裏書す。「アフリカ沿岸の黑人は貨幣なくして價値の表徴を有す。其は純粹觀念的なる象徴にして、彼等が其の抱懷する欲望に比例して、各般の商品に對し精神裡に於て附與せる尊敬の程度に基礎を有す。或る一の貨物又は商品は三 Macutes、他の夫れは六 Macutes、更に他の夫れは十 Macutes に値す。其は單に三、六、十と呼稱するに等し、價格は彼等が彼等の間の有ゆる商品に就いてなす比較に由り形成せらる。此の時、特定の貨幣なるものなく、各個の商品は他の商品の貨幣な

り。今此の物件評價の方法を吾人の間に誘導し來りて吾人の夫れと合併せよ。世界の凡ゆる貨物及び商品、或は全然他と分離すと思料せらるゝ特定國の凡ゆる貨物及び商品は一定量の Macutes に値す、而して此の國の銀を Macutes の數と等しく分割すれば、該銀分割部分は一 Macutes の象徴たらん。若し此の國の銀の數量を二倍せりと假定せば、一 Macutes に對して銀は二倍となる可し。然れ共銀を二倍すると共に、Macutes をも等しく二倍せば比例は從前の如くなる可し。印度發見以來二十對一の比率を以て歐洲に於ける金銀增大すれば、貨物及び商品は二十對一の比率を以て騰貴すべし。然るに他方若し貨物及び商品の分量が二對一の比率を以て增加すれば是等貨物は二十對一の比率にて騰貴し、二對一の比率にて下落したれば結局割合は單に十對一に落着し可し」(ch. VIII pp. 216-217)

如上の言説は彼れの眞意を充分に忖度せしむるに足る。前掲の貨幣價値論は正に此の一節に照して解釋せざる可らず。

是より先き既に、英國に於て同一思想を吐露せる者に John Locke あり。彼れの陳述は前述諸家の夫れと稍々其の趣を殊にするも、其の根底に至れば即ち一なり。彼れは貨幣と貨物とを對比し、以て貨幣の手段たるの故を以て貨物を支配する理法により調整せられずとし、斯くて前述諸家と同一結論に到達せるものなり。曰く「總て物の價値を正當に算出せんと希ふ者は、其の捌口に比例せる其の數量を量定せざる可らず」然るに「貨幣に對する欲望は恒に殆んど到處同一にして其の捌口には極めて微少の變動あるに過ぎず、而も他に容易に其の缺を補促するものなければ――其の數量を減少せば恒に此の價格を增大し、此の同一分量をして他物の更に大なる分量と交換せしむ」(p. 60)と。彼れが貨幣を手段として目したるは「貨幣と貨物との差異は貨幣が概して其の交易に據りて吾人に資し其の消費に由る事殆んど無きの點に存す」(p. 51)てふ一節より明察せらる。

然れ共、貨幣を手段と目する事に於て、明截なる陳述をなせる者は後人 David Hume ならん。即ち彼れは著名なる一節に於て言ふ「貨幣は本來商業の目的物の一に非ずして、單に人々が貨物相互の交換を容易ならしむるが爲めに協定したる方便に過ぎず。そは交易の車輪に非ずして、車輪の運動をして更らに圓滑輕易ならしむる油なり」(p. 309)と。又曰く「貨幣は正に勞働及び貨物の代表に外ならざるものにして、單に是等のものを率定し、若しくは估料するの手段として役立つのみ」(p. 312)と。從つて彼れは必然 Locke の見解を踏襲したり。而も彼れは引場裡に限局し、以て Montanari の Davanzati に對すると等しく重大なる改修を行へり。「汎ゆる貨物の價格は貨幣と貨物との比率に依賴し、一方に於ける顯著なる變動は價格を引上ぐるか引下ぐるか孰れかの一影響を有する事自明の理なりと思考せらる。貨物を增加せば其は低廉となり、貨幣を增加せば其の價値は騰貴す。同樣に他方前者の減少並びに後者の減少は夫々反對の傾向を呈す。而も物價は一國内に存する貨幣及び貨物の絶體量より、市場に現れ若しくは現る可き貨物、及び貨幣流通量に繫依するは明白なり。若し鑄貨が函中に閉塞せらるれば、其は物價に關し滅却せられたると同一なり。若し貨物が倉庫中に藏匿せらるれば、相等しき結果を惹起す可し」(pp. 316-317)

以上縷述し來れる如く、貨幣數量説は伊英佛

の名目論者に由り主張せられ、既に有力なる學說となりつゝありたり。然るにスミス以後、該用語は金屬主義者に由り、單に結論相似たるの故を以て、其の根本精神を異にする學說を意味せしめらるゝに至りぬ。（本節に述べたる論客の貨幣論は高橋誠一郎教授により本誌上に於て既に紹介せられたるもの多し。附記して讀者の參照に便す。「近世始期に於ける貨幣制度の紊亂とベルナルド・ダヴンザッチの貨幣論」第八卷第九號第十號、「ジョン・ロックの利子學說」第十二卷第十二號、（以上經濟學史研究收載）「デヴィド・ヒュームの貨幣論」第十四卷第三號）

今や吾人はスミス以前の貨幣價値論を檢討し終れり。斯くて吾人は正統學派貨幣價値論生誕の沿革を知得し、主觀的貨幣價値論の萠芽を探求し、貨幣數量說を檢覈し、法制的名目學說の先蹤を發見したり。然れ共本論文の主眼とする所は爰にあらずして、寧ろ是等を背景として貨幣本質觀と貨幣價値論との關係の一斑を描出せんとするに在り。詳言すれば、貨幣を目的と觀じ、以て實體價値を必要とするに至り、斯くて貨幣價値を支配する理法を一般經濟價値論に覓むるに至れる一派と、貨幣を手段と觀じ、以て實體價値を不必要とするに至り、斯くて貨幣價値を支配する理法を一般經濟價値論より獨立せる土臺の上に建立するに至れる一派とを對比するの一事に存す。何故に然るやの問題には爰に觸れず、其は別個の問題を形成す。（完）

婆羅門教法制に現はれし徵利思想

芳賀忠次

一

古代諸國は徵利に關する思想に於て歩調を俱にして居つた。其を非難せる根據たる理論に於ては各自年代を異にし地域を異にし、特有なる社會組織と特有なる哲學、宗教を保持するに從て差異を生じ、一方の實踐的なるに反して他方の論理的なるは免れ難きも、しかも何れも徵利を非難して單に禁止せらるべきのみに非ずして一の罪惡と做し敢て犯す者は罪人として一定處刑を課せらるべきものと爲す事に於て一致して居つた。古代の社會は等しく高利に苦しんで居つた。當時に於ける資本の寡少なると、貸手の有力なる土豪にして借手の貧弱なる農民たる場合多く且つ其は主として消費の爲になされしの事實は利率を自ら高歩に置き、社會全般を困窮の淵に沈淪せしめた。徵利貸借は貧窮せる農民を益々窮迫に苦しましめて寡少に有する者より其有する寡少なる物を奪ひて多額に有する者に是を與ふるの事實を示し、當時にありては貸金業よりも多額を所得し得る產業は存しなかつた。而して斯くの如き事實こそ等しく古代諸國に於て徵利を目して罪惡なりと做さしむる原因を爲すものであつた。

希臘に於ける Platon, Aristoteles の利子に對する態度、羅馬に於ける十二銅表を以つてする利子の制限、Cato Cicero, Sencca, Pliny, 竝に Columella 等の徵利に對する非難、舊聖書に表はれし希伯來の徵利思想、新約聖書竝に原始基督